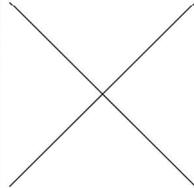


京都リサーチパーク株式会社
経営企画部長
足立 毅 氏

電子開発株式会社
代表取締役社長
中尾 崇 氏



協業の力で「技術だけ」から「節電ソリューションの創出」に踏み出す

企業の事業拡大支援やリサーチパーク（※1）「京都リサーチパーク（以下、KRP）」の運営などを手掛ける京都リサーチパーク株式会社（以下、京都リサーチパーク）は、「KYOTO OPEN ACCELERATOR（※2）」を通じて、特許技術保有の節電製品「スマート・スイッチ」などを開発する電子開発株式会社（以下、電子開発）と協業しました。今春から KRP 内の施設を利用した節電の実証実験を開始し、将来的に新商品の開発や節電ソリューションの展開につなげていく計画です。KYOTO OPEN ACCELERATOR で大手企業と協業した 6 社の中で、最も“卵”の段階だったという電子開発を京都リサーチパークが選んだ理由や協業への期待について、京都リサーチパークの足立毅氏と電子開発の中尾崇氏に聞きました。



自社だけでは知り合えなかった企業と話せた

——京都リサーチパークは自社にも企業サポートや企業間の連携を支援する部門がありますが、KYOTO OPEN ACCELERATOR の参加企業の立場となっていたかがでしたか？

足立：新規事業の立ち上げは当初、社内完結で行おうとしていました。新規事業を考えるときにはまず、社内のリソースを棚卸しすることから始めようと考えていたんです。その考え方に KYOTO OPEN ACCELERATOR を主催した DBJ や Creww 株式会社も考え方が似ていたので興味を持ち始め、当社も共催者のみならずプレーヤーとして参加してみようと決定しました。

KRP 地区内には 400 社強の企業が入居しているほか、KRP 地区の入居以外にも事業を支援している企業が多くあります。KYOTO OPEN ACCELERATOR に参加する前はそういった地区内外の既存ネットワークを活用して何かできるのではないかと思っていたので、当初は全国から企業を募るといったことは考えていませんでした。参加してみると、社内のワーキングだけではおそらく知り合いになれなかった企業ともたくさん話げできたので、とても価値があったと思います。

——協業先を選考する過程で大変だったことは。

足立：12 人のメンバーでプロジェクトに取り組んでいますが、当初 28 社に応募いただいた中から選考して 2 社に絞り込みましたので、自分が主担当になっ

ている協業案が落選した人もいます。それはとても心を痛めました。担当する協業案が落選したメンバーがやる気を損ねたらどうしようという心配をしていますが、残った協業案を応援する雰囲気がありまし、残った協業案のサポートに付くメンバーも増えてきました。落選したことがしばらく納得できずにいた人も複数人いました（笑）担当になれば先方との関係も築いていくものですし、それだけ思い入れを持ってプロジェクトに取り組んでいるということだと思いません。落選した企業とも縁を切らさず、今後の可能性を求めていこうと思っています。

——電子開発が KYOTO OPEN ACCELERATOR に応募した理由をお聞かせください。

中尾：当社は簡単な取り付けで節電を実現する「スマート・スイッチ」を開発しています。当社は技術しか持っていないと言っても過言ではありません。どこか協力していただける会社があればという一心で KYOTO OPEN ACCELERATOR に応募しました。

足立：電子開発は節電に関する効果実証をしていますが、その効果がすごく高い数値だったんです。当社の施設を管理する電気の専門家がその数値を見て、「これ、ほんまか!？」と驚いたことから電子開発への注目が集まりました。電子開発の節電効果はほかの新技术関連の企業と比べても際立つ印象でした。特許も取得されていますし、しっかりした技術をもって成功したいという姿勢がすぐに分かりました。



技術をさらに向上させ、協業の力でますます拡大へ

——今春から早速、実証実験を始めるそうですが。

足立：KRP 内のスタジオ棟を使って実証実験をします。たくさんの企業が利用している敷地なので、万全の体制を整えて実施します。

中尾：当社は世の中の役に立つ技術の開発や特許取得を実現することに集中していたので、実証実験に京都リサーチパークの協力が得られたことをとてもありがたく思っています。

協業スキームの第 1 フェーズとして今春からの実証実験を行い、第 2 フェーズでは販売と製品のブラッシュアップ、第 3 フェーズでは新商品の開発と節電ソリューションの展開と運んでいくよう計画しています。

——開発自体は電子開発の会社設立より数年前から手掛けていると聞きました。

中尾：最初は会社を作ろうとも、特許を出そうとも思っていませんでした。ともかく困っていることを何とかしようという思いで製品を作っていました。その段階で、特許を出した方がいいのではないかと考え、特許を出願しました。その次に、やはり世の中に広めるためには会社を作った方がいいと思い、会社を設立しました。投資家から融資も受けられ、開発はさらに加速しました。それに加えて今回の KYOTO OPEN ACCELERATOR で京都リサーチパークとの協業が決まり、ますます拡大していく可能性を感じています。当社は技術しかありませんが、その技術面はさらに上を目指していきたいと思っています。

——今後の展望や期待することをお聞かせください。

中尾：これから京都リサーチパークとともに、開発した製品をどのように市場に展開していくか探っていくにあたり、まずは当社の事業を確立させることが大事だと考えています。技術者が開発に専念できる環境を作り、今の技術をプロダクトとして展開していける体制早く構築することを目指しています。市場に展開していく中で、京都リサーチパークのリソースを活用させていただき、節電の重要性を世の中でよりいっそう認識してもらうことも重要になってくると思います。京都リサーチパークとは、さまざまなビルの「節電コンサルタント」のようになろうという話もしており、節電に関して広く取り組んでいければと思っています。

足立：KYOTO OPEN ACCELERATOR では参加企業 4 社が合計 6 社のスタートアップ企業と協業しましたが、電子開発だけが現業になっていない、技術しかないという根っこのような、卵のような段階です。その卵をふ化させていこうというような取り組みは、他社はあまりしないかもしれません。当社のようにインキュベーションに関わる会社だからこそ、電子開発の技術に心を動かされました。

通常はふ化するまでのこの先の時間感覚が分かりづらいと思いますが、だからこそ当社の“サポーター魂”に火が付くんです。「当社としてはこういう企業こそコラボレーションすべきではないか」と熱く語るメンバーもいます。京都は大学や研究機関が多く、そういった機関からも力を借りながらさまざまな用途開発やアドバイスができるのではないかと考えています。用途開発の段階から、可能性を感じられる事業だと思っています。



(※1) リサーチパーク

企業や国の研究機関などが集まった敷地や研究学園都市を指し、研究開発の高度化・効率化を目指しています。「京都リサーチパーク (KRP)」には医療、電力、ICT 関連企業や大学・研究機関だけでなく、企画・営業、建築、不動産などさまざまな業種の企業が入居しています。

(※2) KYOTO OPEN ACCELERATOR

「KYOTO OPEN ACCELERATOR(京都オープンアクセラレーター)」とは、多様な事業領域や顧客基盤、強固なブランドなどの経営資源を有する京都拠点の参加企業 4 社（京都リサーチパーク株式会社、コーデンシ株式会社、株式会社ニッセン、株式会社はてな）と、斬新なアイデアやノウハウを有する全国のスタートアップ企業とのオープンイノベーションによる新規事業創出を目的とするプログラムです。2017年9月、参加企業 4 社の有する経営資源を活用した新規事業案をスタートアップ企業から募り、その後約 4 カ月間にわたる書類選考、1 次・2 次選考のプロセスを経て、参加企業 4 社とスタートアップ企業 6 社の連携に至っています。